

## 沖縄慰霊の日2 「平和の詩」から考える

6月23日の学校だよりでは、「沖縄慰霊の日」の意義や、私たち一人ひとりにできる平和への取り組みについてお伝えしました。今年の沖縄全戦没者追悼式では、中学2年生の亀谷琉奈さんが「平和の詩（下記参照）」を朗読しました。私はその詩を読み、改めて戦争とは何か、そして平和とは何かを深く考えさせられました。詩には、沖縄戦を経験した曾祖母の体験が描かれています。爆撃の音が鳴り響く中、愛する人の無事を願いながら必死に走り続けたこと。恐怖と不安でいっぱいになり、自分でも気づかぬうちに右足を傷つけていたこと。そして、その傷が一生消えずに残っていたこと。戦争について学ぶとき、私たちは被害者数や戦闘の経過などを知ります。しかし、この詩が伝えてくれるのは数字ではありません。一人の人間が感じた恐怖や悲しみ、生きようとする強い願いです。だからこそ、読む人の心に深く響くのだと思います。

詩の中で繰り返し語られるのは、「生きたい」という切実な願いです。私たちは普段、明日が来ることを当然のように考えています。しかし、戦争の中では、その「当たり前」が失われました。家族と過ごす時間も、友達と笑い合う日常も、将来の夢を語ることもできなくなってしまった人々がいました。だからこそ、「平和は当たり前ではない」という言葉の重みを私たちは受け止めなければなりません。皆さんには、この詩を読みながら一つ想像してほしいと思います。もし自分が同じ時代に生きていたらどうだったろうか。もし家族や友人と離ればなれになったらどう感じるだろうか。もし今日の日常が突然失われたらどうだろうか。そう考えることが、歴史を自分事として学ぶ第一歩になるはずです。

戦争を体験した人々は年々少なくなっています。しかし、その記憶や願いを受け継ぐことはできます。亀谷さんが曾祖母の思いを詩に託したように、私たちも平和の尊さを学び、次の世代へ伝えていく責任があります。戦後80年以上が過ぎた今も、世界では争いが続いています。だからこそ、沖縄戦を経験した人々の声に耳を傾け、命の大切さについて考え続けることが必要です。

亀谷さんの詩の最後にある「平和な未来へと繋いでいくために」という言葉を、ぜひ皆さん自身への問いかけとして受け止めてください。沖縄慰霊の日をきっかけに、命の尊さ、そして今ある日常のありがたさについて考えてほしいと願っています。

## 平和の詩

あの日の沖縄には 青い海も 優しい風もなかった 空は黒く 地面は揺れ  
人々の叫び声が絶えなかった 爆撃の音が 心まで壊していく まだ若かった曾祖母は  
小さな体で必死に走った 血だらけの道を 倒れた人たちの横を もう動かない人を見ながら  
涙を流す暇もなく ただ生きるために そして 愛する夫の命を案じながら 「お願い 生きていて」  
その想いだけを胸に 足がもつれても 呼吸が苦しくても 転びそうになっても 前へ前へと走った  
しかし その願いは もう二度と届かなかった その時のことを話す曾祖母の声は  
今でもとても優しい でも 私は知っている その優しい声の奥に 今も消えない悲しみがあることを  
細い足 しわしわの手 小さな背中 長い年月を生きてきたその姿を見るたび 私は戦争の重さを感じる  
そして 曾祖母の右足には 今も傷が残っている それは 戦時中 自分で引っ掻いた傷  
灰色の空の下 爆撃の音が鳴り響く 恐怖と不安でいっぱいになり 右手に握った石で  
自分の右足を何度も何度も引っ掻く 気づけば手も足も血だらけだった  
私が真実を知った時 胸が締めつけられた どれほど怖かっただろう どれほど苦しかっただろう  
生きたい 死にたくない その想いだけで 曾祖母は必死に生き延びた  
戦争は人を傷つける 体だけじゃない 心まで壊してしまう 家族と笑う時間 友達と過ごす日々  
「また明日ね」と言える幸せ そんな当たり前を 全て奪ってしまう  
でもそれは 当たり前なんかじゃない 血と涙の中を生き抜いた人たちが 命を繋いでくれたから  
今の私たちがいる もし曾祖母が あの日 走っていなかったら もし あの日 命を落としていたら  
私はここにいなかった 曾祖母の右足の傷は ただの傷じゃない 「生きたい」と強く願った証  
「戦争は二度としてはいけない」という叫び 私はその想いを これから先も伝えていく  
もう誰にも 血だらけの道を 走ってほしくないから もう誰にも 愛する人の命が奪われることに  
怯えてほしくないから もう二度と 沖縄の空を戦争で 染めてはいけないから  
平和は当たり前じゃない たくさんの人の涙と苦しみと 「生きたい」という願いの上にある  
だから私は忘れない 沖縄戦で苦しんだ人たちを 愛する人を守ろうとした想いを  
泣きながら生き抜いた人たちを  
そして 曾祖母の右足の傷を 「生きたい」と願った証の傷を 平和な未来へと繋いでいくために